

研究

RESEARCH

生涯学習としての吹奏楽活動 ～ママさんブラスという活動形態～

富山大学大学院修了
松浦 絵美

はじめに

さまざまな形で実践されている生涯学習の中で、音楽活動を考えてみると、合唱、吹奏楽、オーケストラ、バンドなど演奏活動のほかカラオケも普及しており、またコンサートなどの音楽鑑賞も含まれるであろう。この中で特に、吹奏楽に着目すると、社会人のサークルとしては、職場サークルと地域団体などがある。小・中・高・大学などの吹奏楽クラブで経験を積んだ人は、社会に出てからも吹奏楽を続けたいと思うであろう。学校時代に吹奏楽を経験した人た

ちが、社会に出てからも続けようとした場合、いくつかの形がある。職業として吹奏楽が取り入れられているのは、消防署、警察、自衛隊などの吹奏楽隊である。これ以外に、大小さまざまな職場サークルがあり、また各地域で活動している吹奏楽サークルがある。全日本吹奏楽連盟に加盟している団体の数は、小学校が一二五、中学校が七一八八、高等学校が三七九二、大学が三三二となっている(二〇一〇年十月現在)。

「職場・一般の部」に属する団体の数は、職場の部が八八、その他が一七七一団体となっていて、

小・中・高・大の部活の団体数よりかなり少ない。社会人となると、時間のやりくりなどの問題から、学校時代のようにには思うように活動できなくなる。活動時間として、仕事の後の夜の時間帯か、土・日の午後などを使うことになる。年間を通じて活動している団体もあるが、コンクールが近づいた時期だけ結成される団体も存在する。

学校の吹奏楽クラブを構成するメンバーの多くは女性だから、社会人のサークルでも女性の比率は高いはずであるが、結婚して子育てが始まると、このようなサークル活動を続けることは難しくなる。しかし、吹奏楽活動を続けた

いという希望は多く、そういった女性たちの中から、活動を続ける工夫が生まれてきた。それは「ママさんブラス」と呼ばれるサークル活動で、幼児や子どもを伴った独特な活動形態である。そのほじまりは、宮城県仙台市の子育て中の女性たちの「びよびよ隊」というグループと言われている。「マ

マさんバレーやママさんコーラスだつてあるのだから、ママさんブラスもできるのではないか」と考えた主婦が、自分たちの生活スタイルに合わせた時間帯とルールを設定して、ユニークな吹奏楽の団体を結成したのである。活動をはじめてみると、あつという間に十人、二〇人とメンバーが増え、今では一〇〇人規模の大所帯になったという。多くの女性が、時間や子育てなどの問題で社会人バンドに参加できず、楽器を持て余している状態だったようだ。

この「びよびよ隊」の活動がきっかけとなって、「ママさんブラス」は、口コミやインターネットを通じて他の地域にも広がりを見せ、全国にいくつものサークルができていく。育児や家事をしながらも吹奏楽のサークルを実現するというこの活動は、生涯学習のひとつの形態として大変興味深い。

本稿では、生涯学習としての音楽活動のうち、このような「ママさんブラス」を調査することとし



▲練習風景
(アンサンブル☆ファミリー)

た。各地で活動している「ママさんブラス」の団体が、どのような活動を行っているのかを実態調査し、これによって、「ママさんブラス」という形態の可能性と展望について考察した。

「ママさんブラス」の調査

社会人のサークルの中で、女性の場合、子育てが始まると活動を続けることが困難になる。一般団体は社会人の活動時間に合わせ、主に夜間にスケジュールが組まれていくからである。夜の七時頃からという活動時間のものが多く、中には十時からという団体もある。育児中の女性が夜の時間帯に活動を行うのは難しい。また、

コンクールを目指す団体の場合は、活動日数や時間において、かなりハードな練習スケジュールが必要となる。

このような状況の中で、子育て中の女性が集まって、自分たち特有のスケジュールや活動形態を工夫できないかという考えから、「ママさんブラス」というサークル活動が生まれ、全国的な広がりを見せている。活動時間は、一般団体とは違って、平日の午前中の十時からや十二時からといった時間帯を中心としたものである。注目すべきところは、子どもを自由に遊ばせる場所を用意したり、子どもを練習に参加させるなど、親子一体の活動を基本としたことである。この形態により、子育て中多くの女性が活動に参加することが可能となり、活動の規模が大きくなっていった。そしてこれが、マスメディアの紹介、転動による人の移動、またはインターネットなどを通して全国に広がり、現在「ママさんブラス」の団体は全国

で一〇〇を越えるほどになっている。

この「ママさんブラス」の活動が実際にどのように行われているのか、アンケートと団員へのインタビューによる調査を実施した。調査期間は二〇一〇年である。調査した団体は、宮城県仙台市の「びよびよ隊」、石川県金沢市の「アンサンブル☆ふみりあ」、福井県越前市の「ふくびよ隊」、新潟県新潟市と上越市の「ひかり音楽隊」である。

以下に調査の概要を示す。

(1) びよびよ隊

二〇〇二年に発足した、初めての「ママさんブラス」の団体と考えられる。子どもがいても吹奏楽活動を続けたいというママが立ち上げた「子育て中のママたちのための子育て中のママたちによる吹奏楽を特徴にした育児サークル」である。吹奏楽で温かい演奏を目指し、その演奏を広く楽しんでもらうことを目的とし、仙台市とそ

の近郊の母親とその子どもたちで構成されている。活動場所は仙台市内の文化センターで、対外的な演奏活動としては、幼稚園・保育園・児童館・市民センターへの訪問、文化交流催事への参加、そして毎年のファミリーコンサートである。現在メンバーは九〇人ほどおり、一回の練習では約二〇人が参加している状況である。活動日は木曜日と土曜日に設定しており十時から十三時までの三時間ほどで、土曜日だけ参加しているメンバーもいる。

子どもたちの世話は交替制で行っているが、「びよびよサポート隊」という、子どもたちの相手だけをするボランティアのメンバーもいて、子どもたちへの絵本の読み聞かせを行っている。子どもたちは、練習中はブルーシートが敷かれた場所に座るか、親の近くに来てよい。運営は代表者が中心に行っており、子どもサポート係や指揮者などは交替制で行っている。なお、子どもへの衛生面にお



▲子ども達の様子

いても十分な注意を払っているという。

(2) アンサンブル☆ふぁりあ

二〇〇七年に結成され、八〇人以上のメンバーで活動を行っている。練習時間は、休日と平日の週二回の午前十時から十二時までで、その中に子どもが参加する手遊びの時間も設けられている。演奏会のみに参加するという人も存在するため、毎回の練習には三〇〜四〇人ほどが参加しているが、休日と平日とで来るメンバーが違うため、全員が揃うのは演奏会などの限られた場である。休日にはメンバーの家族が臨時で参加し、子どもの相手をしている。また、

演奏中に子どもを世話する育児サポーターとよばれる役割もあり、メンバーで交代して行っているが、さらにNPO法人のボランティア団体へも応援を頼んでいる。市の公共施設を二つほど利用して練習を行っている。練習する場所の前にブルーシートを敷き、そこに乳幼児や三歳未満の幼児を座らせ、キッズサポーターの方がお世話をする。三歳以上の幼稚園と小学生の子どもたちは基本的に自由行動で、高学年になるとパーカッションなどの楽器を習うこともあり、別室で二人ほどのママが係として指導を行っている。

(3) ふくびよ隊

二〇〇七年に結成した。子どもを第一に考えて活動しており、親子で共に楽しむことに重点を置いている。仙台市のびよびよ隊にいたメンバーが越前市に移って作った団体で、月に一回程度の依頼演奏を行っている。保育園訪問や、地域音楽団体の演奏会、公共イベ

ントへの出演などである。人数は一〇〜五人前後と、まだ小規模であるため、認知度を上げるためにテレビや新聞からの取材、チラシの配布など、PR活動を行っている。活動内容は、越前市内の公共施設を二、三箇所利用し、主に土曜日に練習を行っている。月二回は平日も行い、休日に来られない人の時間を確保している。練習中の子どもの遊び相手として、楽器を演奏しないサポーターメンバーもいる。練習後には、子どもたちと手遊びや絵本の読み聞かせ、踊りなどを行うキッズタイムを設けている。

結成してから数年と、まだ日が浅いため、メンバー不足などの問題はあがるが、練習形態や団体運営方法などは確立されている。演奏技術を磨くのではなく、楽しい時間を過ごすための活動なのだそう。親だけでなく、子どもと一緒に楽しむということが重要であるため、子どもと吹奏楽との結びつきが課題である。子どもが小さな

頃は、リズムに乗って楽しんでいたが、成長と共に練習に来たがらないようになることもある。そのため、演奏会に出演させるなど、子どもたちを飽きさせないような工夫もしている。

(4) ひかり音楽隊

二〇〇八年に結成され、新潟市と上越市に活動拠点がある。メンバーは四〇人前後であるが、毎回の練習には一五人ほどが参加している。金沢市の「あんさんぶる☆ふぁりあ」に所属していた人が新潟市に引越して活動をはじめた。テレビの取材や、市の情報誌への掲載、ソーシャルネットワークサイトなどにコミュニティを作るなどして、団員募集を行っている。定期演奏会や訪問演奏を主にやっており、ホールのある公共の会館を利用し練習を行い、その施設の演奏会にも参加している。新潟県は、他に比べて吹奏楽の一般団体が多く、吹奏楽コンクールを目指す団体も多い。そのため、

自分の演奏技術を考慮して一般団体への入団をためらう人も多い。それもあって、高い目標を掲げるのではなく楽しく活動ができる「ママさんブラス」を結成しようと考えたのだという。また、運営システムは確立しきれておらず、隊員の様々なニーズを聞きながら模索している最中のように見えた。仕事をしている人も多く、他の団体よりも活動時間の確保が困難である。

問題は多いが、生活に密着した活動であるため参加希望者は多く、今後さらに発展させ、隊員が満足できる環境を整えていきたいと考えている。

考察

調査を通じて、「ママさんブラス」に参加している女性たちは活動に生きがいを持ち、そのことが家庭生活にも良い影響を与えていることが分かった。年齢層が近いというだけでなく、子育て中のあるいは子育てを経験していると

いう同一の環境・経験が、主要な因になっていると考えられる。学生時代の経験もそのまま活かすことができる。また、ブランクが十年以上という人も少なくないため、現役でないことに劣等感を持つことなく気軽に参加できることも魅力であるようだ。それは、これらのグループが、コンクールを目指すようなプレッシャーの多い練習をするのではなく、あくまで音楽の活動を楽しむことを目的としているからであろう。依頼されて演奏をするようなケースでも、子連れであることを前提としており、依頼した相手もそれを理解してくれていることが多いため、演奏に向きやすい。

育兒経験をしている者どうしの意見の交換はとて有意義であり、子育てについて話し合えるサークルとしての役割も担っている。そのため、子育てに対してのストレスが減り、生活に活力が生まれているという。子どもたちにとっても、早い段階から音楽に触れることはとてもよい経験になり、音楽活動を楽しんでいる母親の姿を見ることが、自分も吹奏樂を始めたかと考えている子どももいる。「ママさんブラス」は、子どもの存在を中心として活動が行われていることから、家庭生活に密着した生涯学習といえる。

一方、活動をしている者はすべてが主婦だけというわけではなく、仕事を持っている方もいる。そういう人は、時間的な問題からサークルの運営にはあまり関わる事ができない。また主婦として子育てしていた場合でも、仕事復帰と共にサークルを辞める人も少なくない。「ママさんブラス」は、その活動に理解があるのであれば、子どもがいない人や、あるいは男性であっても参加してもよいとされている。しかし、「ママさん」という言葉に象徴されるように、子どもを持つていなければ参加がためらわれるであろう。